

Title	J. R. ベッヒャーの生涯と作品 : ファシズム解放40周年を記念して
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 70(2) p.61-p.78
Issue Date	1985-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81073
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

J.R. ベッヒャーの生涯と作品

— ファシズム解放40周年を記念して —

八木 浩

J.R. Bechers Leben und Werk

— Aus Anlaß des 40. Jahres der Befreiung von Faschismus —

Hiroshi Yagi

Wir haben nach dem Zweiten Weltkrieg mit großem Respekt J.R. Becher gelesen. Es wurde viel von ihm übersetzt und über ihn geschrieben; doch heute nach 40 Jahren ist dies bei uns immer seltener geworden. Natürlich gab es in diesen 40 Jahren große Veränderungen, auch auf dem Gebiet der Lyrik.

In den 36 Jahren des Bestehens der DDR sind mehrere Generationen jüngerer Dichter herangewachsen, die mit anderen Methoden und mit anderem Bewußtsein über Natur und Gesellschaft schreiben.

Auf der Weimarer Tagung der Goethe-Gesellschaft Weimar „Wirkungen und Entdeckungen Goethes im 20. Jahrhundert“, an der ich teilnahm, berieten wir in 12 Arbeitsgruppen verschiedene interessante Themen; doch „Goethe und Becher“ als Thema zu behandeln, war für diesen internationalen Rahmen allzu aktuell gewesen.

Doch ich sah, daß seine „Winterschlacht“ mit Heiner Müllers Vorspiel erneut aufgeführt wurde, daß diese Aufführung eine starke Erinnerung bei den Deutschen erweckt hatte. Auch „J.R. Becher und der Kulturbund“ — so hieß das Thema der Konferenz, die von Präsidium des Kulturbundes und Zentralen Arbeitskreis J.R. Becher am 9. und 10. November 1984 in Berlin veranstaltet wurde — war eine der wichtigsten Veranstaltungen anläßlich des 40. Jahrestags der Befreiung vom Faschismus, und mehrere Referate erscheinen in Nummer 5 1985 der „Weimarer Beiträge.“ Dort stehen zum Beispiel solche Worte: „Das geistige Identische des Kulturbundes mit Becher“, „Seine überragende Rolle als Wegbereiter, Initiator und langjähriger Präsident, als Pragmatiker und Organisator des Kulturbundes.“

Da ich mit vielen Kollegen und Freunden eine Anthologie zur DDR-Lyrik verfassen möchte, ist es jetzt günstig, mich mit diesem bedeutenden Dichter noch einmal zu beschäftigen, seine positiven Seiten zu überlegen und zu fragen, ob etwas von ihm jetzt als überholt gelten könnte. In diesem Sinne habe ich hier seinen Lebensweg mit seinen Arbeiten umrissen, d.h. in vier Kapiteln die vier Stufen seiner Entwicklung zusammengefaßt.

1

ヨハネス・ローベルト・ベッヒャーは1891年5月21日ミュンヘンに生まれた。父は地区裁判所判事ハインリッヒ・ベッヒャーである。1911年インゴルシュタットのギムナジウムを卒業したヨハネス・ベッヒャーはベルリン・フンボルト大学、ミュンヘン大学、イェーナ大学で医学、文学、哲学を修めた。そのかんにすでに第一詩集『春の恩寵』(Die Gnade eines Frühlings)、小説『大地』(Erde)が出版されたが、¹⁾かれが自分の性格を形成し始めたのは1913～1915年ごろであった。すなわちベッヒャーは1913年には『革命』(Revolution)と『新芸術』(Die neue Kunst)という雑誌を友人バッハマイル(Bachmair)とともに出し、1914年には初期の代表作である第二詩集『没落と勝利』(Verfall und Triumph)を出し、1915年には『白表紙』(Weisse Blätter)や『行動』(Aktion)というクライスに属し、戦争に決定的に反対、反戦運動に集中した動きを示したのである。それから続々と、1916年の『ヨーロッパに寄せて』(An Europa)、『兄弟の結び』(Verbrüderung)、1917年の『国民のための詩』(Gedicht für ein Volk)、1918年の『時にさからうペーアン』(Päan gegen die Zeit)、『新詩集』(Das neue Gedicht)が続いて出される。こうして詩人は詩で政治宣伝を行い、その人道主義で自己の脱皮をとげたようだが、実は表現主義に強くひかれて、むしろその波に乗って運動している。

それゆえに、表現主義についてベッヒャーがみずから回顧している後年の言葉には、批判や否定の中にも強い暖かさがかよっているのがよくわかる。1929年刊の詩集『われらの時代の人間』の序文で、表現主義の精神的態度について、「われわれは自分の中に全人の姿を移し、それを実現しようと情熱的な決意をしていた。人類の夢の中にいくさはじき出てきたのだ。何をなすべきかと尋ねてみた。そして無をつかみ、無を見つめたのだ。内にも外にも灰色があった。われわれは疑問符で、しかも燃えたつ疑問符であった。そして自らは疑問以上に疑わしかった」とのべている。表現主義の形式的原理について、かれは、「新しい世界感情がわれわれをゆり動かした。それは事件の同時性の感情である」という。ヤーコプ・ヴァン・ホデイスはベッヒャーをこの種の詩で深い感動におとし入れた。そのような原理はホーマーからすでにあるのだ、とホデイスはベッヒャーに語った。ベッヒャーは『詩の原理』(Das poetische Prinzip, 1957)でさらにのべている：「屋根が落ちるかと思えば波が高まり、この世では何一つ独立しては存在せず、無限の関連のもとにある。

たいてい人は鼻かぜをひくという句と汽車が鉄橋から落ちるという句が同時にあるのだ。惨事は同時的な無なしには考えられない。…この原理体験をわれわれは詩に造形しようとした。…同時性の体験は紋切型になり、官僚的作詩となり、…その恣意と無秩序があらゆる関連と総合を失ってしまった。…しかもすでに新しいできごとがわれわれの文学を脅かそうとしていた。第一次大戦の始まりである。」

ベッヒャーはこうして、表現主義を否定しつつも、その人間観と形式観をよく理解しようとして、そのただ中にある。それゆえ表現主義の詩人群、とくにホッデイス、ヴェルフエル、トラークル、ベン、ハーゼンクレーフェル、シュタードラーなどとベッヒャーの比較が多く、初期ベッヒャー研究の重要テーマなのである。²⁾ (また表現主義以前の詩人でベッヒャーとよく比較されるのはリヒャルト・デーメルである。³⁾ 表現主義の詩人の中でベッヒャーにとくに影響したのは、クルト・ヴォルフ刊の年鑑詩集『最後の審判』の中のゲオルク・ハイムだった。⁴⁾ アルチュール・ランボー好きのベッヒャーは、1912年にハーベル川でスケート中に夭折したこのドイツのランボーを熱狂的にこのんだという。ことに戦争や大都市のさまざまなハイムの幻は、ベッヒャーのベルリンを歌った詩に足跡を残した。「ベルリン!ベルリン!…千の電車がかすめすぎ… 塔は大海にそそりたち…死体検査場は…」というようなハイムのイメージによるらしいものがベッヒャーにもみいだされる。のちにベッヒャーは『ぼくらの時代の人間』という詩でこの時代のことをかえりみて歌っている。学校は何の信念もなく、何の理念もない。ただ過去の重荷で動いている。女は金で動かせる。神などいるはずがない。物質的ニヒリズム、人間の自己疎外、この時代の詩人もまた無気力な出口を探しているだけではないか。それは夜の、幻影の文学、死と無意識の文学だった。それは人間のあらたな地平をひらきはしたが、叫びと大洪水であって、何の実りも精神にもたらさなかった。「ぼくらは詩を書いた、多彩な酔い痴れた詩を／ああ あ の にぎやかな賛歌のなかで／いったい何が残ったろう。／死を求める一つの叫びだけ。」 また同時性を用いてこううたわれている：「洪水はおしよせてきた、大地はゆらめいた／汽車が棒立ちとなり／魔物のように雲の上を走ってきて／日没の空に赤くもえていた。」⁵⁾

社会主義リアリズムがこのような表現主義を厳しく批判したことはいうまでもない。ベッヒャーの詩境についてアレクサンダー・アブッシュは次のようにしるしている⁶⁾：「ブルジョア文学はその新しい出発が、あらゆる在来の芸術形式を破壊するにあたり、偽りの道徳と不妊になりゆく芸術によって特徴づけられるブルジョア世界に対する個人的反逆にあると思った。ここで途方もなく革命的身振りをしたのは[…]実はブルジョアデカダンスの特殊な表現形式にすぎぬことがあきらかとなる。」ところでこのようなデカダンス論議は今日大いに下火になってきた。表現主義論争でのルカーチのリアリズム論と同じく冷静なはかりにかけられている。表現主義が、社会主義リアリズムの攻撃したブルジョア・デカダンスの表現形式だったか否かについては、音楽では12音階などの技法が、絵画では力強い形態と立体と色彩が、詩では抽象や飛躍や同時性やモンタージュが新生命をひらき、その他いろんな面で現代文化の基礎をなしたことを考えると、誰も疑いにとざされるであ

ろう。ピカソのゲルニカのような形式と内容を見るに及んで、柔軟に考えざるをえなくなるのではなかろうか。

ベッヒャーはしかし表現主義におぼれ、そこにとらえられたままではいかなかった。ベッヒャーは考えた、人間は一つの立場に徹底できてのち、そこに露見した一つの誤りを見出したからには、常に転進し、離別していく卒直さと勇気とを持たねばならないと。大戦が始まるやいなやベッヒャーは、すぐに自分の大きな誤りを、時代の芸術の大きな欠陥の一つとして修正しようとした。形態的にはルカーチのいうように、新即物主義を予知した別種の表現主義にとベッヒャーの詩は動いていく。⁷⁾ ルカーチは表現主義について、一般に表現主義が自ら失望したのちに三つの方向に向ったという。一つは生活のかてを得んとして商品化し、他はナチに続く方向へと反動化し、さらに一つは革命的な労働運動に転じた。この時代にはゲオルゲのように人間の精神化をめざすグループもあったし、リルケのように内面化した空間を掘りさげる詩派もあったし、ホーフマンスタールのように伝統を生かして生み直そうとする人もいたが、ルカーチはそれらに見向きもしない。その他多くの自律の道を行きつあった詩人にもルカーチは目もくれない。ベッヒャーもまたこれと同じであった。「容赦せずに進まねばならなかった。埋葬し、捨て去り、息もたえだえの単語の列のがらくたから、自分自らを打ち倒す比喩から、単純な、人間的な言葉を救い出さなくてはならない。」表現主義を評価しそこから学んだということはベッヒャーにとり共時的なことであり、それを克服しそれをのりこえるということは通時的なことだったのではなかろうか。ユートピアを去り、純粹で、客観的で、パトスのない詩を書こう、自己満足や自己投影の遊びのない詩を書こうとする即物的傾向は、大戦をさかいとして強まっていく。これはベッヒャーのみに限らず、大戦のみじめな日々心身ともにさらされた詩人と人間一般の要求となっていた。しかし新即物主義の具体性、感情拒否、意図なき事実性が一種の虚無と懷疑とシニズムをもち、審美的なものをもつ点で、表現主義からの離脱とはいいいきれなかったのに比べ、ベッヒャーの場合は、同じ客観性でも、学ぶという、マルクス主義という、また労働者階級の解放という思想のために即物的となったので、それだけにより鮮かな離脱となっているのである。ベッヒャーはいう：「われわれは新しい芸術を信じる。国民芸術、千万の人々に読まれ、歌われ、上演される、世界のあらゆる創造人の闘争と労働のリズムであるような、力強い歌の生成を信じる。」しかしベッヒャーはプロレタリアの生活と闘争に密接な詩を探索し続けているのであって、転進は決してそう簡単ではない。「詩人は美しい和音を捨てる。／ストライキ 戦争反対！ 詩人は鋭く太鼓をかきならす。／霰弾のような文章で民衆の心をわきたたす。」ここにはハイネのエピゴーネンがみられる。また一抹のロマン主義もぬけ切れない。「ぼくらは何とかなたくなになってしまったことか。／それでも昔はみんな子どもだったのだ。／泣いたこともあったのだ。／たくさんの人殺しを見せつけられて／みんなこんなかたくなになってしまった。⁸⁾」

そこでアブッシュが次のようにのべていることが了解されるだろう：「かれを駆りたてたのは具体的認識というよりはむしろユートピアのひびきだ。切れ切れの激情の叫びはまだ芸術的形式をお

しのけていた。内容と形式の不明確さは互いに因となり、果となっていた。詩人の意欲は呼びかけられた人民大衆にはわかりにくく、近よりにくかった。詩人は自分を、その芸術的素性を、表現主義を未だ克服していなかったのである。⁹⁾」ここでわれわれはブレヒトが『バール』の中でベッヒアーを引用して冷くみつめるシーンを想起してもよいだろう。ブレヒトはベッヒアーを冷静に評価していた。その欠陥をみぬいていた。ブレヒトにおいては表現主義とマルクス主義がベッヒアーのように大きなギャップをひらかなかった。それはブレヒト特有の根強い自然主義的な、非道徳的なリズムによるのではなかろうか。いずれにしてもこの2人がきわだったマルクス主義詩人のタイプを獲得したことで、マルクス主義なしで詩を作ることが不可能になったほどなのである。

2

ワイマル共和国の中でマルクス主義の詩をかかげてたたかうベッヒアー：この点で迷いも狂いもないベッヒアーを他の詩人、作家、芸術家と比べるとき、その特色と価値が強まるといえよう。たいていの作家たちは屋根に火がつくまで、国家の危機には気がつかず、それぞれの美の追究に熱中していたようである。ベンやS. ツヴァイク、フルトヴェングラーやR. シュトラウスなど、芸術に熱中して危機の至るを知らずであった。だがベッヒアーにとっては、反動勢力をいかにおさえ、民主勢力をいかに伸ばすか、ファシズムをいかに防いで、ドイツの変革をなしとげるかが、ワイマル共和国の命を握る問題であった。ベッヒアーの単純・強固なこのパースペクティブは正しかったし、その点においてこそかれの詩人としての意義もあきらかであった。

ベッヒアーのこの道が明らかになったのは1917年のロシア革命のときだった。1917年の『ドイツ詩人の R. F. S. R. へのあいさつ』(Gruß des deutschen Dichters an R. F. S. R.) は、Russische Föderative Sowjetrepublik へのよびかけの詩である：

Es triumphieren nicht die Henker!
Und nicht die grausen Schlachtenlenker...
Euch alle stürzt der Zeit Gericht.
Um nun die Herrschaft der Barbaren.
Schon steigen an die Sklaven-Scharen,
Und ihre alte Fessel bricht.

1918年ドイツ革命にあたって、かれはスパルタクス団に参加、1919年にはコミュニストになり、続々政治詩を出版しはじめる：『すべての人に』(An Alle, 1919年 R. ルクセンブルク, K. リープクネヒトに捧げられた), 『永久に激しく』(Ewig im Aufruhr, 1920), 『神をめぐって』(Um Gott, 1926, 宗教問題にとりくみ, 世界感を探る。)1923年にはマルクスとレーニンを根本的に研究し、やがて次のような詩集やその他の作品が生まれた：『レーニンの墓地で』(Am Grabe Lenins, 1924), 『労働者, 農民, 兵士』(Arbeiter, Bauern, Soldaten, 1925, 詩劇), 『前進! 赤色戦線よ!』(Vorwärts, die rote

Fornt/ 1924, 散文集), 『機械のリズム』 (Maschinen—Rythmus, 1925)。こうしてかれはドイツ史の中でカル・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクという尊敬すべき政治家を見出し、その道につづいた。1950年1月15日の日記にかれはこうかいている：「カル・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクが殺されたのを知ったのは、わたしがイエナにいた当時だ。カルとローザはレーニンとともに、わたしを救い難い混乱からひき出してくれた。今のわたしの夢はかれの夢と一つである。かれらの夢はどんな期待にもまして力強く見事に実現された。わたしにはカルとローザの *trotz alledem* という反抗精神は、単に社会的なものに対してのみならず、その他に対してもおよそ人間のとるべき態度の典型だと思われる。この *trotz alledem* の姿こそ底知れぬ虚無のみにくさに対決する人間的形姿にはかならない。」

こうしてかれの詩は、常に帝国主義戦争の危機、右翼の陰謀との対決をめぐってかかれていく。アブッシュは、「十分な社会的認識、はっきりした党派性、労働運動への参加のために、ベッヒャーは、新しい詩形式を得るのに成功したのだ」といっている。今やかれの詩は新しい形式と労働民衆との結合点を見出し、すべてはそこから生み出される。『失業者の死』は、闘争の気力を失い、ガス自殺するプロレタリアを描き、社会矛盾を考えさせる好適の詩となり、語る言葉で、わかりやすく、軽やかに、深刻な自殺を扱っている。『顔』という詩では、自分だけのことを考えない人が、あらゆる人の苦しみを自分の顔に刻みつける。ショーウィンドーの顔になったり、死人の顔になったり、むりにいろんな顔を押しつけられ、いろんな顔をもっている人となる。『オルゴール』という詩では、狭い路のオルゴールがみんなに元気を与え、感動させ、明日の夢をみさせる。『都市』という詩では、田舎から都市に出て、貧富の差におどろき、胸をひきさかれる人が歌う：「神さま、なぜこんな始末になったのでしょうか。／一方には毎日贈り物をもらえる子供のように／幸福なひとびとがいるのに／たいていのひとびとは息づまるようなあなの中で／今にも死ぬかもわかりません。』『石』という詩でも、田舎から出てきて、失業、病、妻の死にあった労働者が、「おいらは石なのだ」という：「石ははだかさ 着るものなんかいりゃしない。／こんな石だっていつかはきつとたちあがる。／たくさん集まりゃ手ごわい塊になる。／石、石、石、石／石／石に石／石の山がぬくっとそびえたつときこそ…／おおそれはいつのことか。」¹⁰⁾

井上正蔵はベッヒャーを「内面的な自己変革の詩人だといった。パウル・リラはドイツ文学の偉大な賛歌の詩人、真にインディヴィドゥアルな詩人だといった。」¹¹⁾ ベッヒャーは表現主義独特の誇張した比喩や言葉のデフォルメから単純な人間の肉声を救い出し、悲壮な音響にみちた、浮かび出るような形象で現実をうつしたのである。1921年にかれはいっている：「突然わたしは舌の中で語った。感じ、書き、叫び、投げつけた。シラブル、シラブル、未知の言葉、ドイツ詩の始めにして終りであるもの、いや、さらに多くを。もう自我ではない。峰起であり、突発であり、使命であった。すりへった時代はとび散った。あらゆるエレメントは叫びをあげた。…」しかしその表現にはひとりよがりなゆきすぎもあった。それについてアブッシュはこうのべている：「超単純性や直接効果や革命への関心のために、檄文的散文に迷いこみ、文学の遺産を放棄した。独自のものを高貴なド

イツ文学の遺産とまだ結合していない。」

1925年にベッヒャーは国家反逆罪、神をけがした件でとらえられたが、やがて釈放される。1926年には毒ガス反対を声明した小説、『(CHCI=CH)₃ ASC (レヴィジエーテ) または唯一の正しい戦争』(Levisite oder der einzig gerechte Krieg) を出版、再び国家反逆罪の件で訴えられ、1927年に投獄された。この小説のためかれは正確に資料を集め、付録をつけた。近く戦争がありうることが判然とする統計数値、警告の叫び、争う見解の対立—そこに唯一の正しいたたかい、帝国主義の一味に対する世界のプロレタリアのたたかいかかげようとした。¹²⁾ ベッヒャーの投獄に対し、大衆的な釈放運動がおこり、ロマン・ロランを始めとし、各国の作家、知識人、労働者の抗議がつづいた。この作品の二つのモットーは、ゾラの言葉、「わたしは黙っていることはできない。わたしは罪に加担したくないからだ」であり、もう一つはクラウゼヴィッツの「わたしは断固訣別する、偶然によって救われるかもしれないという軽卒な希望から、鈍い心で見究めようとせぬ未来へのあいまいな期待から」である。「そのことが、読者よ、ここで論じられるのだ」とモットーは強調している。1928年1月20日、マクシム・ゴーリキーはベッヒャー擁護のため全世界に訴えてのべた：「豊かな才能に恵まれた作家は決して数多くない。20世紀のヨーロッパにはほとんどまれにしかみられない。ベッヒャーはだれにもまして才能のある詩人である…ブルジョワジーはとっくにわかっているはずだ、サッコとヴァンツェッティを7年にわたる拷問の末に虐殺してしまったり、いままたベッヒャーを裁判に付したりするような自己防衛方策では、ブルジョワは没落するほかなかるう。こんなことではブルジョワへの憎しみは激化し、かれらは一步一步没落するにちがいない。」リラは今日のアメリカにまで届く予言の書だとのべたが、核兵器と闘う今日に届く書といっても過言ではない。

このころのベッヒャーの視野のひろがり、ロシアの詩人マヤコフスキーに学ぶことによるともみられる。またソヴィエトをまのあたりみたことにもよる。1927年にかれはロシア革命十周年のソ連を訪問、帰国後ドイツプロレタリア革命作家同盟を作り、その議長として29年から機関誌 Links-kurveを発刊した。1930年ハリコフで第二回世界革命作家大会が開かれると22ヶ国の代表の1人として出席、経済と戦争の危機を訴え、革命文学の任務を強調した。このような経験をへて、1931年には、日本でも久保栄らにより紹介された『大計画』(Der große Plan, 1931) という壮大な叙事詩を出して、ソ連の新しい国づくりをたたえた。これにはマヤコフスキーの詩を思わせるところがある。¹³⁾ またかれはこれまでの経験を『われらの時代の一人間』(Ein Mensch unserer Zeit, 1929) というテーマにまとめて出版した。その序文でかれはこれまでの自分の考えを立派にまとめきっている。アブッシュはこうのべている：「今や力強い、社会的で革命的な詩でその芸術形式をますます高い単純さへと発展せしめ、形式は生きた内容に血をかよわせ力を得た。」またベッヒャーのこのころのエッセイは、『現実には憑かれた詩作』¹⁴⁾ と題されている通り、帝国主義戦争を防ぎ、革命に転じようとして、与えられた自己をのりこえ、闘う集団の中で生れ変わろうとしている詩人の告白である。反戦、インテリと大衆、文学と労働運動などがいつもテーマになり、意識的な歴史のアクチュアルな現実に接近しようとしているのである。

3

ワイマル共和国の終焉を思うとき、現実と、はなやかな文学・芸術の成果とのあまりにも大きな落差に茫然となる。多くの天才とこのみじめさと、おびただしい夢とヒットラーの出現。もしこれらのすぐれたひとびとが社会と政治に対し鋭い注意を怠っていなければ、文化の力でヒットラーをくいとめられたかもしれない。それを思うとき、ベッヒャーのラディカルな生き方だけが了解されるものとなってくる。ブレヒトのこのころの作品、『母』や、『屠殺場のヨハナ』などもその点では同じであった。

1931年1月、SSはベッヒャーの家を2時間前から包囲して国会に放火し、それを коммуニストのしわざだと断言した。ヒットラー内閣が組閣され、かれの書物も禁書リストに加えられ、市民権を奪われた。やむをえずベッヒャーは国外亡命したが、「ぼくはドイツ人だ。どんな愚か者でも／ぼくの市民権を認めるだろう。／ぼくが市民権を失うはずがない。」といった。1933年からかれはオーストリア、スイス、チェコ、フランスにのがれつつ反ファシズムの闘いを続け、1935年以後はソビエトに移住した。この年に詩集『一切を信じた男』(Der Mann, der alles glaubte)を書いた。またバリの作家会議に出席、文化の国際的擁護にも協力を惜しなかった。何よりも大きな収獲はソビエトにきたことであり、それがかれの政治的、芸術的、人間的理想をゆたかにした。そのようにかれは告白をくり返している。それがかれの生涯の決定的な事件だった。T.マン、H.マン、フォイヒトヴァンガー、A.ツヴァイク、ゼーガースなどとともに出した雑誌『国際文学』(Internationale Literatur)の責任編集を始めたベッヒャーは、多くの人の力をあわせ、反ナチ・祖国解放の運動につくした。文書やラジオによる多忙な運動のひまに、1938年ロンドンとモスクワから同時に詩集『幸福探究者と七つの罪』(Die Glücksucher und die sieben Laster)を出版、詩の内容も形式もいよいよ巨匠の域に達した。このすぐれた詩集についての Horst Haase の研究(1963年)は、この詩集をよく知ってこそ、ベッヒャーのその後の作品が解明されうるものになろうと強調し、「徹底した反ファシズムの闘争」、「歴史と現在・ヒューマニズム的伝統」、「中心にバラード風」(Im Zentrum : das Balladeske)、「モダンに、しかしモダニズムでなく」(modern, aber nicht modernistisch)などのテーマをかかげて詳細に論じつくすものである。¹⁵⁾

ベッヒャーは1936年に、ドイツ人民戦線のよびかけ「自由と平和とパンを！」に署名している。ベッヒャーのそのごの作品は内容的にはドイツ国民につよく結びつき、形式的にはオーデ、ソネット、叙事詩、小説、ドラマなどにひろがっていくものであった。¹⁶⁾ 1939年『勝利の確信と偉大な日目の展望』(Gewissheit des Sieges und Sicht auf große Tage)、『ソネット全集』(Gesammelte Sonette 1935—1938)、『叙事詩集』(Gesammelte epische Dichtungen)、1940年『再生』(Wiedergeburt, Dichtungen)、小説『わかれ、あるドイツ悲劇の第一部』(Abschied. Einer deutschen Tragödie erster Teil. 1900—1914)を出したほか、¹⁷⁾ 1941年にはタシュケントの亡命先で、ヒットラーがソヴィエ

トを襲ったさなかに『モスコウのたたかい』（のちに冬のいくさ）（Schlacht um Moskau ; Winterschlacht）と題した、戦後ブレヒトも上演した、評価の高いドラマをかいた。この終りの2作は詩人ベッヒアーがものにした異色の小説とドラマであった。1942年には捕虜と語ったり、ラジオ放送でドイツに呼びかけたりしつつ、1943年には自由ドイツ（Freies Deutschland）という国民委員会に参加して活躍、未来のドイツを計画しようとした。1944年には『高き見張り ドイツ詩集』（Die hohe Warte. Deutschland-Dichtung）を出した。とくに「国際文学」にのせた物語り詩『ルブリンの靴』の幻想とヒューマニティとアクチュアリティは有名である。¹⁸⁾

この10年間、ベッヒアーはどんなときでも希望を失わなかった。ドイツがどうなるべきかについての信念は少しもゆらぐことはなかった。『黒雲』、『重苦しい時』『ドイツ』、『祖国の涙』、『ドイツに寄す』などに亡命者の信念が祖国を包みこんでうたわれている。だがなんといっても力強い傑作といわれる作品は、『最後の夜』、兵士のうたう『ぼくの家庭には』、ある母をうたう『街をめぐる泣声』、その他さらに『脱出する母』、『兵士の顔』、『クローバー隊の物語』、『スターリングラード周辺の戦場』、『息子の帰りを待つ母』、『三人』のような、戦争の非人間性を訴える反戦詩のかずかずである。ルカーチはこれらの詩のことを新しいドイツ詩と賛えて、祖国から去ったこととソヴィエトに亡命したことが一つになったところにかれの力の源泉があったとみる。亡命したからといって悲歌になったりしない。いわゆる常識的な亡命ではなかったことを、ソヴィエトを歌った詩集と散文集がよく語っているところである。¹⁹⁾ ルカーチはまたドイツとはというテーマの詩群を2つに分類している。一つは社会主義の建設をめぐるもので、ナチスと闘って新しいヒューマニズムを築こうとするものである。もう一つはドイツの過去を完全に見直そう、新しい価値をつくろうとするもので、リーメンシュナイダー、ゲーテ、ヘルダーリン、ケラー、バッハ、ベートーベン、さらにトルストイ、ゴーリキー、セルバンテス、ダンテに及んでいる。進歩と反動、人間性と非人間性、善と悪の尺度がいつもあきらかで、明るく、澄んだ、しかも悪への憎しみにみちた詩である。対象はダイナミックに、動的に扱われ、展開力が発揮され、すべてが流れあうようで、しかもルカーチのいうように、万物流転というものでなくて、腐敗との生きた闘いの流れなのである。これらの詩は現在も過去も一丸としたドイツとドイツ人との対話の展開である。過去、未来をあわせたドイツ民族の歴史的全体像が、一つの体験の中心からあらゆる方向へ放射されている。しかしかれは国にいて苦しんでいるドイツ人のことを決して忘れず、のちにこうしている通りであった：「過去におけるできごとの人間としての最大の行動の一つ、すなわち人間的な行動そのものとしてわたしの目に映るものは何かといえば、それは人間であることを失わず、強制収容所の煉獄から帰ってきた人々である。何年も動物なみの残虐さにさいなまれながら自らを人間として守りつづけ、人間として帰ってきたこと、これ以上の試練は人間としてありえない。」P. ヴィーグラーは、「時間的なものがベッヒアーの根源であり、超時間的なものがかれの目的である」といった。²⁰⁾ それはこううたわれているのである—「前景には時代とその矛盾／この時代を形成しようとする創造意欲／旧い勢力をふり切って この時代から／自己を解放しようとする人間の姿／背景にはおそるべき無常／め

ざましい力をふるう虚無…」²¹⁾ この両面の一つを欠いても人生の半分しかわからないのだ。この現実の時空にとざされたままで現存在を超えたものを知るのが人間の課題だというのである。虚無に徹するに従って正しい建設にも徹する。ヒットラーの殺人的な言葉に怒りを投げつつ深い価値のある言葉を考える。T. マンはベッヒャーのこれらの仕事について、「これは偉大な書物だ。これこそわれらの時代、われらの苛酷な体験を代表してくれる詩集だ。やがて時代に対する詩的証言として、その価値を認められるだろう。この詩のもつ特色と美、わたしが感ぜずにはおけぬ魅力は、伝統と未来、すなわち形式と革命の結合という点になる。」²²⁾

伝統的な形式をそなえた詩がこのころのかれの詩の特色をなしている。烈しい動的なかれの詩は今や形式のわくの中に凝縮され始める。それは静的な構造と建築美をめざす。かれの詩『殿堂』は建築技師・設計者を賛美し、自己をそれになぞらえている：「思想をもりあげ、ほくも詩をうちたてて…この一節から薄明の空間にさっと光がさしこむ。」かれはソネットの巨匠になる。それはマヤコフスキーとはちがった、ロマン民族最高の芸術の習得である。ここにおいてかれは不均衡の原理から古典的均衡にとたちかえる。1935年に H. マンはかいている²³⁾：「この詩集ではとくに珍しい点として、古典時代以後につくられた最も美しい2、3のソネットがある。…もしこれが、まだ地平線のうしろにかくされているが、第二のルネサンスの最初の微光だとしたらどうだろう。…これらは人生を支配する文学が今日可能だということの最も尊い証明の一つだ。」このようなわけでルカーチもベッヒャーのこれらの詩を、美の救助、事物や現象に内属している特性だという。²⁴⁾ かれの対象把握は美とその社会的対極者との葛藤である。かれの詩美は、詩人の主観と対象の客観の、心と自然・人間界の、能動と受動の、創造と反映の、美と社会性の生き生きした相互作用となった。さらに一言加えるならば、ドイツに対しての党派的結合がベッヒャーを純粋な芸術形式実験から救い出したとなすアープッシュの言葉も注目するに足りよう。またリラはベッヒャーがとってきた迂路をみつめて、祖国の喪失がまた獲得となった過程をみつめていこうとした。²⁵⁾

4

1945年のナチス崩壊直後ベッヒャーは直ちに帰国、7月に文化同盟（Kulturbund）を創設してその会長となった。ベルリンやミュンヘンでかれの告白を聞いた人々は、ベッヒャーの祖国愛がどんなに暖い、変らないものであるかに感動した。「祖国よ、生まれたということにほくは感謝する。おまえはほくを育てた。かつ今第二の生をおまえに負っている。それはほくの精神のよみがえりのことだ。それにほくははかりがたい感謝を捧げる。わが祖国の復活に寄与するほくの仕事は小さいものであってはならないと思う。」『ドイツの告白—ドイツ改革のための三つの演説』（Deutsches Bekenntnis. Drei Reden zu Deutschlands Erneuerung）はこの年のものである。かれはまた『追放時代の詩選集』（Ausgewählte Dichtung aus der Zeit der Verbannung）をこの年に出し、さらにどんどん、新しいエネルギーで、明るく広い視線で、全く建設的に詩をかきつづけた：「おまえの詩は平

和の声でなくてはならぬ、その塔を星のかなたまで築きあげよ」とうたい、また、「そこから追われていても、いつもそこに心がひかれる。どこにいてもドイツにいるのだ」とうたい、反戦平和とドイツの過去の克服のテーマにたえず問題を集中した。

1949年からドイツ民主共和国の歴史が始まるが、そのころのかれの詩は、これまでになかった素朴な性格を示している。それらは内容・形式ともに明快で、民衆が楽しめる、極めて音楽的なものであった。しかしそれは自然主義や寫実主義とはちがひ、もののかなめを軽やかにピックアップしたり、ことの論理を簡易にふちどっている。色調は明るいオプティミズムで、民衆的だが、それほどロマンチックな情感があるわけでもない。これらはあまりにも非西欧的であるので、西ドイツからは陳腐なものといわれがちであった。一例を示してみよう。

古いしらべ

これは古いしらべではないか
あらたに胸によみがえるのは。
それは風に そよ風に吹かれ
遠方から吹いてくるのだ。

夕暗迫る風の中で
梢がうなだれるいま、
われらの沈黙を通り
いくさにたおれた人がいく。

これは古いしらべではないか
あらたに胸でかなでるのは。
昔のようにまたわれわれは
夕暮にそれをうたう。

われらのなかにつぶやきがあり
それが大きな合唱となる。
そしてわれらは星空に
つつましくひとみをあげる。

もう一例示してみよう。次の詩についてはブレヒトのエッセイがある。²⁶⁾ブレヒトは青年たち(Pioniere)にいかん詩を読み、そこから満足をかちとるかについてこの詩を用いて語った。なぜ

この詩は美しいか。夜とひるの、明暗のたそがれの時代をベッヒャーは体験した。ファシズム支配のかなしみ、それを打倒した社会主義のよろこび、狼にもひきさかれることのないふるさとの青空。これ以上美しくうたえるだろうか。というようにブレヒトはベッヒャーの詩を語っていく。ベッヒャーは素朴そのもの、(すなわちこのもっともむつかしいものによって) つぎのようにうたったのである：

ドイツよ わが悲しみ

ふるさとよ わが悲しみ
朝あけに ほの光る国—
空よ わが青い空
おお このわが喜びよ！

いつか言ってくれるだろう。
かって追放されたとき
なお きみをほめたたえ
きみにうたを送ったと。

きみと一つになろうと
わたしはうたをきみに捧げた。
そしてあの暗がり
きみと二人で泣くために。

空が輝いた、青く
そして平和が帰ってきた。
ドイツよ わが悲しみ
おおこのわたしの喜びよ。

国民企業というようなテーマの詩もあり、ともかくも国民の中へ、というのがかれの詩のすべてであった。「詩人は国民にさきがけるべきものだ。(Der Dichter soll dem Volk vorangehen.)」「国民にうたを与えること。詩人にそれ以上の仕事があろうか。名なきものとなって国民の中へ進み、うたとなって国民にはこばれること、それこそ眞の名誉で、不滅のことといえよう。」「眞に民衆的なものの中に、単に今日のみがあるのでなく、明日もまた含まれている。あの平板で自然主義的な民衆ぶりは社会主義リアリズムの方法とは矛盾する。」このような抱負は達成されたかにみえるが、「よ

ろこびの叫び われら国民の自由／勝利の祭日よ 五月一日よ」とか、「美しいのだ人生は／すばらしいのだ、人間は」とかいう詩句をみると、発想が古すぎるといわれそうなところもあった。社会主義リアリズム詩に概念や抽象が露出し、一般化や団体化が個をおしのけ、公共や陳腐さがのさばりでて、創造や個の豊かさを感じられず、楽天的すぎ、かつ虚勢を張るようにみえるとき、これらの詩は一過性のものになりはしないか、と憂えられるのである。西ドイツ側はかれの詩を黙殺しがちであるが、リラはベッヒャーの詩が民衆にうけ入れられたことを強調し、それを民衆が自分の教養として新しい基礎に立って身につけたのだという。H. マンは優しくてユーモアのある、ロマンチックな感情にも富むベッヒャーの詩を例外的にすぐれたものとなし、T. マンは現実ばなれした宗教臭い言葉をもて遊んだり、役に立たないロマンチックな感傷にひたらないすぐれた詩人となし、ルカーチは、社会主義建設と新しいヒューマニズムの誕生にたいする情熱が豊かな色どりと魂の深いひびきの中に燃えあがっているとなし、いずれもベッヒャーをほめたたえたのである。

いずれにしても DDR でのベッヒャーは多産であった。1946年には『帰郷』(Heimkehr)、『詩による小説』(Roman in Versen)、1947年には『シュワーベン賛』(Lob des Schwabenlandes)、『再生』(Wiedergeburt)、1948年には『暗闇にさまよう国民』(Volk im Dunkel wandelnd)、1949年にはドイツ民主共和国国歌、四巻の詩選集、1950年にはハンス・アイスラーの作曲で、2人で受賞した『新ドイツ民謡』(Neue deutsche Volkslieder)、『遠い幸福近く輝き』(Glück der Ferne leuchtend nah)など続々詩集が出た。1950年には『あらたな仕方でここに希望が』(Auf andere Art so große Hoffnung)という日記、1952年には『詩の擁護』(Verteidigung der Poesie)という詩論集、6巻の選集、『ドイツソネット集』(Deutsche Sonette, 1913～1955年のソネット)を出し、さらに『詩的告白』(Poetische Konfession)、『詩の力』(Macht der Poesie)、『詩の原理』(Das poetische Prinzip)が詩論として世に問われた。ベッヒャーは1958年に数ヶ月の重病ののち10月11日に逝去したが、この年に至るまで筆をおくことはなかった。この年には『世紀半ばの歩み』(Schritt der Jahrhundertmitte. Neue Dichtungen)や『ワルター・ウルブリヒト、ドイツの労働者の子』(Walter Ulbricht. Ein deutscher Arbeitersohn)がある。またドイツ文化同盟の総会で『社会主義文化とその国民的意義』(Die sozialistische Kultur und ihre nationale Bedeutung)と題した講演を行ったが、これはきわめて重要な文献に数えられている。²⁷⁾ ベッヒャーの詩論もこれにおとらず重要で、それらはつねに1. 国家と文学、2. 国家と作家、3. 批判と文学、4. 国民と文学、5. 文学の擁護をめぐるものであった。²⁸⁾ これにかんするベッヒャーの言葉を吟味すると、社会主義での文学をこんなに高く重視した点でまさに例のないものであったことがわかる。

そこでベッヒャーの DDR における生涯について語るなら、ぜひかれの詩人政治家としての活動にふれなくてはならない。かれは1946年 SED の党委員 (Mitglied des Parteivorstandes der SED) に選ばれ、さらに1954、56、58年と3回、党中央委員に選出された (Zentralkomitee der Partei)。1949年には代議士 (Abgeordneter der Volkskammer der DDR) となり、さらに平和擁護ドイツ委員会会長となった (Vorsitzender des deutschen Komitees der Kämpfer für den Frieden)。これにはゼー

ガースや A. ツヴァイクも加わっている。かれの晩年は世界平和を脅かす冷戦と核兵器競争の開始のころにあっていた。1950年にかれはワルソーで世界平和評議会会員となり、重要な発言をおこなった。1954年には文化相、ドイツペンクラブ会長、芸術アカデミー会長、『意味と形式』(Sinn und Form)と『上部構造』(Aufbau) 編集長を歴任。「ドイツ文化統一擁護のためのプログラム宣言」(Programmerklärung zur Verteidigung der Einheit der deutschen Kultur, 1954)を出したベッヒャーは、この方向で東西ドイツの和合と平和のために活躍しつづけた。1952年スターリン平和賞、53年国際レーニン賞、51年フンボルト大学哲学博士、DDRの国民賞2回受賞など、すべての名誉がかれに集中している。

晩年のかれの活動中今日最も有意義とみられるベッヒャーにおける東西文化和解論について、いくらかの言葉をひろってみよう。文化相に詩人が、といて冷たくみられたむきもあるが、この時代の転機にかれが果たした役割を考えるならば、プラスの方がはるかに大きかった。DDRの建国は詩人も政治家も一つになって行われねばならない、たえず両者が冷然と対立していた過去の歴史をくり返してはならない、と思われた。無関心、対立、抑圧ばかりがこれまでみられたにしても、それは過去のこと、これからは、真摯な、人間味にみちた社会主義国家の建設が問題なのだと信じられた。そこでかれは、こういった：「わたしは本職である詩作以外の領域においても、人類の進歩のために欠くことのできぬすべてのもののために、社会人として働かねばからぬ義務を感じている。すなわちわたしの平和のために、われわれの祖国の統一のために、すべての民族との友好関係をうちたてるために、とくにソ連との友好関係をうちたてるために、そしてドイツに真に民主的な革新を行うために、わたしは公職をとおして働かねばならない。」

政治と文学の結合土台が文学である。その関係についてかれはしるした：「わたしの政治的活動は根本においてポエジーの権利の擁護以外の何ものでもない。」しかし「文学は独自の方法で政治的にならぬと、文学は政治にのみこまれてしまう。」文学独自の方法での政治への注目が、ベッヒャーのことばと活動によみとられよう。まずかれは、基本的感情をくり返し強調した。「敵を味方に変えるのをあきらめてしまう人は味方を敵にってしまう危険がある。」「本当に人間的な感情を人に示すことを恥ずかしいと考え、およそデリケートな感受性というものを欠いたざっばくな態度をむしろ誇りにしている人間が今日少くないが、こういった感覚のあり方には俗悪な感情が交っている。」平和とは「常に戦争がないことではなく、心底の勇気からの徳である。」「あくことを知らぬ利己的欲望とわがまま勝手な拡張欲をもった小数の特権者らが、巨大な武器の力をかりて、新しい世界戦争をおこそうとたくらんでいる。」「人類が数千年かかってつくりあげた経験・教養・知識・エネルギー・天才を平和な進歩・発展に役立てうるか、[……] 野蛮な破壊にまかせてしまうかが、世紀の基本問題だ。」これらのことばはそのご30年をへた今日、素朴で力づくよく感じられざるをえない。わたしたちは今日あきらめにけおされがちである。

ベッヒャーがこのような感情と思考でとらえた基本的な方法は実にわかりやすいものですべての人にまっすぐに入っていく。「平和運動はまったく自主的なもので、どんな党派に属するものでも

ない。」「党派というものに属さぬが、歴史の重大な転機にしばしば決定的な役割を演じる人、政治的に無色な人間がいることを忘れるな。」「東西友好的なものの上に立つ論争は今ではほとんどおこなわれていないが、実に必要なものだ。[……] 互いに忍耐よく話しあい、共通なものが損われることなく成長し、深められ、拡がるようにすること。」「たとえどんな政治的立場をとる人間であろうと、[……] われわれの民族の存立に関する根本問題について、共通の結論を見出しうる可能性があれば、たとえどんな小さなものでも無視されてはなりません。」「民族が、祖国が問題になっているとき、その他のことがらにおいて口をきくことすらいやな人間と手を握りあっても決して恥ずかしくはない。われわれはかつてわれわれと一つであったひとりと、そして不幸な政治的なやりゆきの結果われわれと異国の人間のようになってしまった人々を再びとりもどし、かれらと手を握ることができるよう、努力しなければなりません。」このようなことばはあまりにも人間味にみちいて、なんのむつかしさもない。もしこのような考えがユートピアめいてきええとすれば、それはベッヒャーのせいではなくて、ひずみすぎた歴史的現実のせいであろう。今日の均衡・抑止・ブロック対立の考えはここにみられない。かれはいう：「平和について語る言葉は心に迫るものでなくてはならない。平和について人に確信を与えようとするれば、人の常識に訴えるのだ。」しかしこのような話しあいと共存の考えは、西欧でユートピアとして無視されたのみでなく、「平和についてわたしがおこなった講演は沈黙の火あぶりにすべしとの判決をうけた。」それはベッヒャーのひとりごとだ。かれの策略だとそしられた。「そんなでたらめをわれとわが耳にいつていると、そういうでたらめからめざめたあかつきには、拾取がつかない状態になってしまうだろう。」とベッヒャーはそれにこたえた。

このような論争と並行に、1955年、ベッヒャーはベルリンかミュンヘンでDDRの文化発展を強調、東西文学論に言及した。1956年にはミュンヘンでDDRの文化目標について講演した。DDRの文学がはっきりした社会主義建設を目標に進み、労働者たちを広く読者にしようとしているに比し、西独などの文学は小数の知識人にむけられ、国家に対して冷静で批判的であるというようなちがいは、そのごずっと流れていく文学の特色となったが、ベッヒャーはそこに早くから注目し、双方を比較しつつDDRの発展方向を規定したのであった。かれが晩年にのべた文学観を最後にいくらかひろってみようと思う：

1. 国家と文学について：Unsere Literatur muß imstande sein, unsere Ansichten, unsere Weltanschauung verständlich zu machen und die besten Deutschen für sie zu gewinnen.
2. 国家と作家について：双方はたがいに援助しあって共通の目標にすすむ。国民と文学についても同じことになる：Indem die Literatur den Zugang eröffnet für alle Gestalten des Volkslebens, wird sie auch dem Volk selber zugänglich. Nur wenn die demokratische Entfaltung der Lebenskräfte eines Volkes gewährleistet ist, wird die Schöpfung einer Volks- und Nationalliteratur gelingen, die nicht nur das Werk einzelner Besten, sondern auch das Werk zahlreicher Begabungen von bestem Durchschnitt sein wird.

3. 批評と文学について（双方はきりはなせないものであり、批評は国民文学の展開にとって必須のものである。）：Eine Literaturgesellschaft, die der Kritik den Zutritt verwehren würde, wäre ebenfalls zum Absterben verurteilt.

4. 文学の擁護は常に作家の仕事：Es wäre unvollständig, wenn ich nicht betonen würde, daß zu meiner Konzeption der Poesie auch die Notwendigkeit gehört, die Poesie nicht nur innerhalb ihrer eigenen Grenzen, sondern auch außerhalb ihrer zu verteidigen.

このようなアウトラインがそのご35年の東西ドイツ文学と文学研究にどのようにあらわれてきたかを考えることは重要であるが、今ここでそれをのべる余地はない。かれはいう：「友よ、わたしははじめな過去の中で生きてしまった。しかしわたしはこのはじめな過去の一部だったし、またわたしはおそらくこの過去というものもこえることはできようが、ただこれをこえることしかできない。そしてこのものだけをこえて他をこえないところに大きな欠点がある。」かれはさらにもう一つの悩みを告白している。「いつの日か一切の官職がなくなってただ詩人という職業だけが残らぬものだろうか。」「いつになったら文学者としての本来の使命におちついてとりかかることができよう。いったいどうしてもこれ以上、わたしの生きているあいだは平和はこないというのだろうか。」

注

- 1) Becher-Sonderheft. Sinn und Form. 1959 中の Wieland Herzfelde の論文によると、この Roman でノヴァーリスの死が19世紀の大きな悲劇だとべられ、その意志と力が数百万人の幸福と平和に役立つとされている。
- 2) ベッヒャーが G. Trakl を当時知っていたか否かには否定的な返事が多いが、Verfall というテーマが2人に共通しているので、2人の比較がしばしばこころみられる。例えば Paul Rilla (Der Weg J. R. Bechers. In: Essays. Henschel-Verlag) はこうのべた：「文学の純粋なひびきでのべられた疎外された人生の重苦しい悲しみや、冷い月光下のたそがれや夕暮の色彩や、腐敗の甘美な香りはベッヒャーにもみられるが、それは死のヴィジオンではない。そこには人をめざませる呼びかけがみられる。」また前述の W. Herzfelde は Verfall や Verwesen が G. Benn の目標であるに比し、ベッヒャーのそれは二元論的で両極的、客観的・社会的であるとなす。Georg Maurer (Zu J. R. Bechers poetische Sendung. In: Was vermag Lyrik? Reclam 1982) はベッヒャーがこのシニカルな不快なほらあなからすぐに脱出したのだと強調する。ベッヒャーにも、「はじめさの身近な描寫や天上の救いと天国」があるが、そこにはヴェルフェルの殉教や懺悔が、マゾヒスティックな既存のものへの屈服がみられない」とのべ、またベッヒャーの "Der entfernte Georg Trakl" という、トラークル没後に書いた詩を分析するという、「表現主義詩人ベッヒャーににっていたのは Hasenclever だった。」ベッヒャーは1950年に、「ハーゼンクレーフェルを事物の底に導いたのはレーニンの帝国主義だった」とかいた。
- 3) Sinn und Form の Sonderheft は1912年のベッヒャーの Rede über Richard Dehmel をかかげている。同誌で W. Herzfelde は、50才の Dehmel に反論した21才のベッヒャーのこの文をとりあげ、早くからベッヒャーに新しい時代の問題、Triumph und Verfall が大切であり、そのねがいがかデーメルのカオスを生み直し、世界に新しい unsere Zeit をうちひらくことにあった、となす。
- 4) Paul Wiegler: Der Weg. Eine Einführung in das Werk Bechers. Vorwort zum „Wir unsere Zeit.“ および Georg Maurer の前述 2. 参照。
- 5) 井上正蔵・高原宏平訳：ベッヒャー詩集。1955創元社。他に井上訳『遠い幸福近く輝き』1959（世界名詩集大成 ドイツⅢ。）

- 6) 道家忠道・志村浩訳：アレクサンダー・アブッシュ，文学と現実，未来社刊 1955
- 7) Georg Lukacs：Bechers Lyrik (In：Schicksals-Wende. Aufbau-Verlag 1956.
- 8) 上掲書 5
- 9) 上掲書 6
- 10) 上掲書 5
- 11) 井上正蔵：ドイツ近代文学研究 1955 三一書房
- 12) 1936年にソヴィエトでこの書を出した時にベッヒャーはいった，不十分な失敗作だ，いそいで書いた未完作品だ，即座にものに手をのばしたがるできことの独裁下に，おそすぎないかとの不安でかかれたものだと。
- 13) Rillaはこの詩を，1931年の第一次スターリン五ヶ年計画の実現をたたえるうたとなす。かれはこの詩の中の Statistik, Bericht, monumental, Sachlichkeit, groß, Kampfなどの特色について説明する。Maurerはベッヒャーとマヤコフスキーの関係をしらべ，その影響がこの作品に出たのだとなっている。マヤコフスキーの影響もあって，内面性をこえ，当時の文学とちがったところに達したが，そこからやがてドイツのうたへと変っていくというのである。
- 14) 小寺昭二編 Wirklichkeitsbesessene Dichtungは6篇のベッヒャーのエッセイを収め，日本で出版された（出版会四季，大阪1968年）なお小寺昭二郎：初期のベッヒャー 京都大学ドイツ文学研究（1964）も注目される。
- 15) Horst Haase：Johannes R. Bechers Deutschland-Dichtung. Rütten & Loening. 1964
- 16) Maurerはこの問題を Becherのことは，Wir müssen die Literatur zugänglich machen für die Wahrheit und die Wirklichkeit.の中にみつめ，みのり多さの原因を内容と形式の中にもみる。
- 17) これに第二部が続くはずだったが，第二次大戦の終りまで扱う構想は実現をみなかった。
- 18) 八木浩訳 ベッヒャー：ルブリンの靴，異郷，1984年9月 大阪
- 19) Sterne unendliches Glühen. Bd. 1, Bd. 2
- 20) 前掲 4
- 21) 前掲11
- 22) トーマス・マン In：J. R. Becher. Schriftsteller der Gegenwart. Kurt Böttcher u. a. Volk und Wissen, 1961
- 23) 前掲 6
- 24) 前掲 7
- 25) 前掲 2
- 26) B. Brecht：Wie man Gedichte lesen muß. 1953 (In：B. Brecht, Über Lyrik. edition Suhrkamp.)
- 27) Alexander Abusch：J. R. Becher, Der erste Klassiker unserer sozialistischen Dichtung (Becher-Sonderheft. Sinn und Form)はベッヒャーの仕事について，die neue Poetisierung des Lebens, in dem die Arbeitenden immer freier werden und alle Menschen mehr und mehr an Zeit und Muße gewinnen, ihre künstlerischen Talente zu entwickeln und allen Reichtum der Kultur zu genießen. とのべた。
- 28) Verteidigung der Poesie (1952), Poetische Konfession (1954), Macht der Poesie (1955), Das poetische Prinzip (1957), なお訳書に篠原正瑛訳『ここに希望が』がある。

その他の文献

- Stephan Hermlin：Zwei Gedichtbände Johannes R. Bechers. (In：Äußerungen 1944–1982 Aufbau-Verlag. 1983)
- Stefan Hermlin：Alle sind aufgerufen. (In：Aufsätze, Reportagen, Reden, Interviews. C. Hanser Verlag. 1980)
- Paul Wiens：Die zweite Wirklichkeit (In：Einmischungen. Publizistik 1949–1981. Aufbau-Verlag. 1982)
- H. M. Enzensberger：Einzelheiten. II. Poesie und Politik. (S. 113–138) edition suhrkamp.
- Dieter Schiller：Bechers "Levisite". Weimarer Beiträge. Heft 4, 1982
- Simone Barck：J. R. Bechers Publizistik in der Sowjetunion 1935–1945. Akademie-Verlag 1976
- Silvia Schlenstedt：Ermutigungen auf vielerlei Art. (In：Wer schreibt, handelt. Strategien und Verfahren literarischer Arbeit

vor und nach 1933. 1983 Aufbau-Verlag

Johannes R. Becher, Bildchronik seines Lebens. Von Lilly Becher und Gert Prokop mit einem Essay von Bodo Uhse. Aufbau-Verlag. 1963

Uwe Berger : Becher. Ein Lesebuch für unsere Zeit. Volksverlag, 1962

Max Niedermayer : J. R. Becher. Lyrik, Prosa, Dokumente. Limes Verlag, 1965

Alexander Dymshitz : J. R. Becher zum "Vom Mut des Künstlers." Reclam

Arbeitskreis J. R. Becher im Deutschen Kulturbund, Gründungsschrift. Deutscher Kulturbund. 1969

Dieter Schiller : ... von Grund auf anders. Akademie-Verlag, 1974

Karl Heinz Schulmeister : Becher und die Gründung des Kulturbundes ; Rolf Harder : Zum Anteil Johannes R. Bechers an der Herausbildung einer Konzeption zur politischen, moralischen Vernichtung des Faschismus ; Marianne Lange : Geistige und bündnispolitische Situation nach 1945 und ihre Beachtung durch Johannes R. Becher ; Ursula Adam : Das Echo auf die Gründung des Kulturbundes des demokratischen Deutschlands in Großbritannien und dessen geschichtliche Voraussetzungen. (Weimarer Beiträge. 1985. 5.)